

2008年10月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

海面気圧では、高緯度域に低気圧偏差、中緯度域に高気圧偏差が分布し、環状の偏差分布が卓越した。帯状平均した東西風では、両半球の低緯度で東風偏差、中緯度から高緯度にかけて西風偏差が分布し、両半球の亜熱帯ジェットは平年よりも極寄りに位置した。北半球のジェット気流は、カナダ北部から北大西洋、ヨーロッパ北部にかけて寒帯前線ジェットが明瞭で、特に準定常ロスビー波の波束伝播が見られた際に強まっていた。対流圏下層の気温では、カナダ北部とロシア西部からシベリアにかけて高温偏差が分布した。これに関連して、同領域の積雪日数は平年よりも少なかった。高周波擾乱の活動は、北大西洋のストームトラック領域からロシア西部にかけては、活動域が全体に平年より極寄りに位置し、特にヨーロッパ北部からロシア西部にかけては、平年よりも活発だった。下旬には北半球の中緯度域で非常に明瞭な準定常ロスビー波の波束伝播が見られ、各地で偏西風の蛇行が強められた。なお、南半球では、成層圏突然昇温が観測され、30 hPa 高度場では東西波数1の偏差分布が見られた。

熱帯の対流活動は、インド洋やインドネシアで活発となったほか、東部太平洋からカリブ海にかけては、ハリケーンを含む熱帯擾乱の影響により活発となった。一方、フィリピン付近や西部・中部太平洋赤道域では不活発だった。南太平洋収束帯（SPCZ）は平年より西偏していた。対流圏下層では、インド洋の活発

な対流活動に伴い、赤道ロスビー波の発生・西進が見られ、対応する赤道を挟んだ低気圧性循環偏差の対が見られた。太平洋では、亜熱帯高気圧が平年より強く、西部太平洋では明瞭な東風偏差が見られた。赤道季節内振動（MJO）に伴う対流活発な位相は、10月前半にゆっくりと西半球側を東進し、インド洋へと到達した。10月後半は、東進が明瞭となり、インド洋からインドネシア、西部太平洋へと到達した。

南方振動指数（SOI）は+1.6となった。

世界の天候

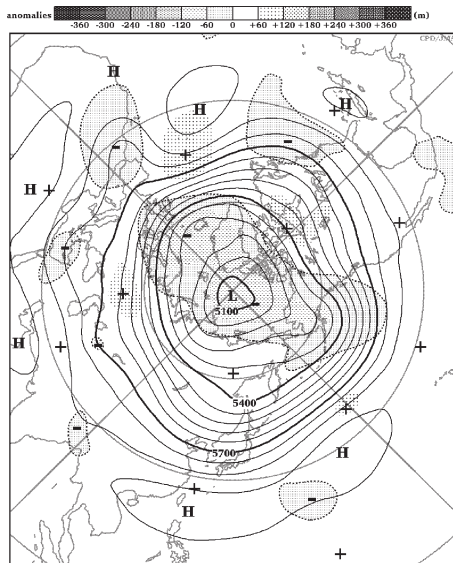
2008年10月の世界の月平均気温平年差は、+0.34°Cで、1891年の統計開始以来、5番目に高い値となった。10月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は0.60°C/100年である。

- 西日本から中国東部では、異常高温となった。
- 中国南部からタイ北部では台風第17号や前線の影響で異常多雨となった。
- イエメンでは熱帯低気圧の影響による大雨で180人が死亡したと伝えられた（外務省による）。

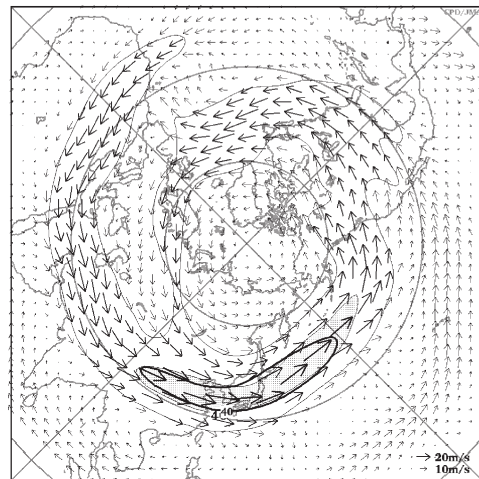
（気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課）

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

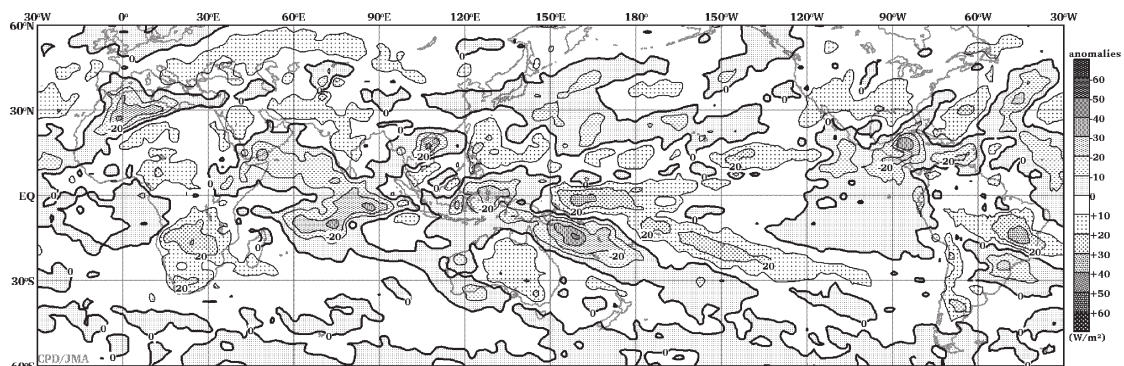
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



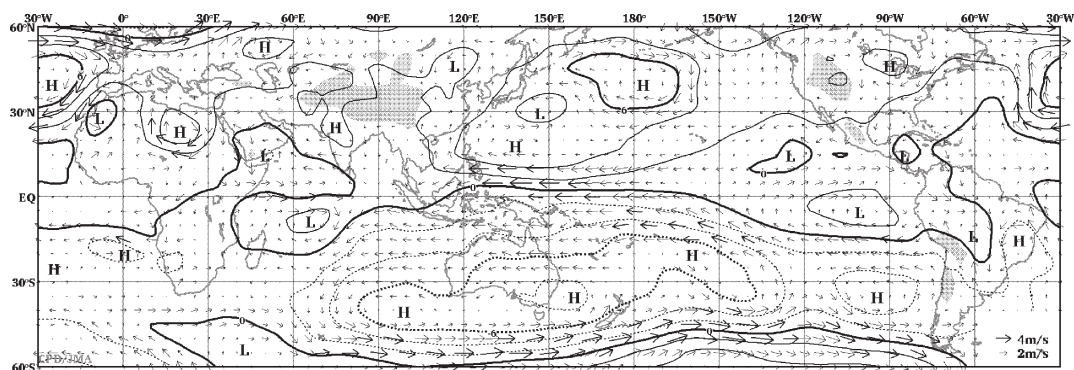
2008年10月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差
等値線間隔は60 m. 陰影は平年偏差. 平年値は1979~2004年のデータから作成。



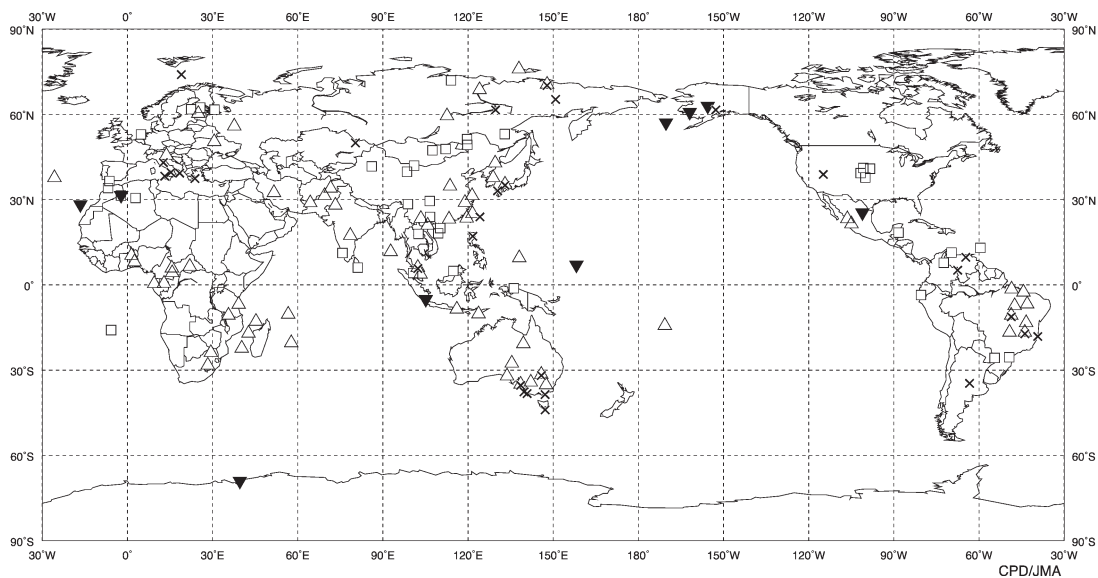
2008年10月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル
等値線間隔は20 m/s. 陰影部は40 m/s以上. 太実線で囲まれた領域は平年の40 m/s以上の領域を示す. 平年値は1979~2004年のデータから作成。



2008年10月の月平均外向き長波放射量年偏差
 等値線間隔は10 W/m²で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データは NOAA、年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2008年10月の月平均 850 hPa 流線関数年偏差および風年偏差ベクトル
 流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 、年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2008年10月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。